
君が望むファンタジー

クラスメイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が望むファンタジー

【Nコード】

N1406Z

【作者名】

クラスメイト

【あらすじ】

主人公のチトセは普通の青年だった。暮らしは貧しかったが…

若さと青春

夕焼けが街を染めていく、焼け付く夕日はある種のノスタルジーを思い浮かばせる。街人は仕事を終え、始める……スキルアカデミー図書館に二人は居た。

レナ「世界混沌に陥る時伝説の勇者現れん…伝説の勇者聖なる剣で混沌の源を断たん…」

レナは本文通りに読んだ。この国に伝わる伝承である。

チトセ「混沌と言うのは戦争か？」

椅子を1つ揺らしチトセは聞いた……

レナは本をパタンと閉じた。

レナ「さあね、でも戦争つても1つのキーワードかもね」

レナ・バレンタイン……ポニーテールの赤髪の少女である。露出の激しい格好で腰に付いた短剣は彼女の戦いに関する知識が詰め込まれている。身長は168cmサイズは彼女の秘密である。

チトセ・フランク……黒髪のショートカットの173cm美少年という訳でも無かったが、そこそこイケメンではある。

二人は小さい頃からの幼馴染みで腐れ縁とも言う。二人で危険な道を歩んだ事もある。遠くで鐘の音が鳴った。すっかり夕焼けは図書室全体を赤く染めていた。レナは時計を見た。5時を時計の針は指していた。

レナ「いつけな〜い、お店の準備をしなきゃ」

レナは椅子から立ち上がり机の上にあった鞆を手に取った。

レナ「チトセ、今日は店に顔を出しなさいよ。」

レナはそう言つて図書館のドアの向こうに消えた。

チトセ「ああそうか、昨日は用事で行けなかつたんだな」

チトセは鞆を肩に掛けおぼつかない様子で歩き始めた。

廊下は赤い絨毯だが掃除の手が行き届いている為常に綺麗に仕上がっていた。

窓から風に乗って草原の香りが飛んでくる。

チトセはスキルアカデミー玄関の所まで来ると大きな夕日とアカデミーの建物を見た。

古風なアカデミーの建物は日に照らされ赤く染まっていた。

下校の生徒は5・6人程度だったろうか多くは無い。

チトセ「あつちいな……」

季節は夏である。焼け付いた校庭はチトセにはうっとおしく感じた。チトセはレナの父親の経営する酒場オールドフレンドに雇われている身である。チトセの父親は若い頃妻を無くし、父親が1つ手でチトセを育てた。今はもう父親の稼ぎでは生活が保てないためチトセ自身が働いていた。決して暮らしは楽ではなかったがレナのお節介の協力もあり幸せではあった。チトセは自宅に着いた。小さな鍛冶屋だったが収入もそこそこあった。

チトセ「ただいま……」

代わり映えの無い室内はチトセを飽きさせた。

チトセ「ちっ、また寝てるのか」

父親のドギは仕事場に居なければ寝てることが多かった。

仕事をしなければ酒に酔い、寝る。

その繰り返しである。

チトセはそんな父親の苦勞も知っていたので、何も言わなかった。

チトセは裏口から出て川の流れている裏庭にたどり着いた。

水源が綺麗なので魚が泳いでいる。

チトセは川の横にある杭についてる紐を引っ張った。

ザザーっと川の中から出た網状の袋からキンキンに冷えた瓶を一本取り出し。中の液体を口に含んだ。

喉を甘い炭酸飲料が潤す。

チトセ「うめー。夏と言えばやっぱりこれだよな」

チトセは川の冷え水を利用してドリンクを冷やしていたのであった。

チトセは草むらに寝転がった。

空を見上げる……月が出ていた。

チトセは思った。このままの生活を取るか、地方へ旅に出るか。今の生活ではとても将来的には絶望的だったため商売も考えた。鈴虫の音がする。

自分が動かなければ周囲の音も良く聞こえるものだ。とチトセは認識した。

義務教育であるスキルアカデミーには金が掛かった。

知り合いも出来たが、いつもレナと居る自分が女だったらしつぱく思えた時代もあった。

アカデミー入学時はそんな些細な事でレナと喧嘩もしたが・・・そんな事を考えてるうちに眠気が襲ってきたのでチトセは身を起した。

チトセ「あゝ、ねみい・・・」

チトセは空き瓶を裏口の隅にある箱へ入れた。これも立派な金になるからだ。

チトセ「さあて、店に向かうかな」

チトセは店に着いた。

松明で明々とオールドフレンドの看板が照らし出されている。

店内から光が漏れて、酒場だけ夜明けの様だった。

チトセは、ウェイターをしているので裏口から着替室に入らなければならぬ。

昔レナの父親バルガスに聞くと着替えもせずに表の入り口から店員が入るとマナー違反と言われた。

裏口のドアを開けるとすぐ厨房である。

ドアを開けるとすぐに呼ばれた。

バルガス「おう！久しぶりだな！」

「昨日会った人物に言うセリフでは無いとチサトは思った。サボった事を嫌味っぽく言ったのだろう。」

チトセは雇われてる身なので仕方なく低姿勢で返事を返した。

チトセ「昨日はすいませんでした・・・」

バルガス「おめえも大変だが、こちらも仕事なんぞな！昨日の分の給料は減らしておくぞ」

バルガスはこの位で済めば良い方だった。初っ端からサボった事があり、それでタダ働きさせられた事もあった。

あの時に比べたらお咎め無しに近い。これも信用という奴なのだろうか？とチトセは思った。

バルガス「しかし、そんな事ではレナは嫁にはやれんなあ！ガツハツハ！」

見事なチトセの裏を付いたバルガスの心理攻撃にチトセはかなりのダメージを食らったのであった。

そしてロッカー室内で着替えを済ませて、チトセは店内に入った。20名位の客がテーブルでくつろいでいる。

毎日違う顔を見せる客はチトセにとって情報網の1つでもあった。もちろん常連客もいたが、それも彼の話のネタになった。

レナ「はいはい、お客さんちよっとごめんね。店が狭くってねえ」

レナが片手ずつシルバートレイに料理を載せ、客の元へ飛んでいく。他の店員も負けないくらい忙しかった。

あちらこちらから、声が飛び交う。チトセも急いで接客に向かった。1時間後・・・

客の年齢層が変化してきた。
夜の酒飲みが多くなってきたのである。

チトセは、厨房のカウンターに肘をつけて店の様子を伺った。
自分もいつかこの酒飲みの客の仲間入りをすると思うと歳だけは取りたくないと思った。

レナ「ちよっとおっさん！手持ち金がこれだけってどういう事？」

レナの怒鳴る声が店内に響いた。
彼女は酔っ払った客の金を数えていた。

レナ「125G？こんだけ？よくこんなのでこの店の酒が飲めたわね！」

パンツとレナが机を叩く。

周囲の客はほとんど常連だったので、皆知らない顔が出来た。

レナはおっさんの襟首を掴んだ。

レナ「金持って無いなら着ている物を脱いでいってもらおうかしら？」

レナは相手が男だろうが容赦ない。何度この店内が戦場になった事だろうか……。

おっさん「だってレナちゃんワシ知らないうちに飲みすぎて……」
レナは怒りに任せ手に力をこめた。

レナ「ふざけんじやないわよ！自分の財布の確認も出来なくて酒なんか飲むなつての！」

おっさん「ひい」

チトセ「まあまあ明日持つて来ればいいじゃないか」

レナはチトセの声に振り向いた。

チトセ「……な？」

チトセは出来るだけレナと視線を合わせないように言った。

相当怖い顔してたに違いない。バルガスも顔を出さない……。

レナはおっさんから手を放した。

シルバートレイを脇に持ち、

レナ「あゝ、もうっ！チトセは甘いんだからっ！」

大股でレナは去っていった。

客は知らない顔で再び賑わいだした。

チトセは客の気分を害した事を謝って、その場を収めた。

しかし、厨房でレナと顔を合わせたが無視された。

レナの気分は後で謝れば許されるだろうと、いつも甘い考えをしてしまうのがチトセの悪い癖だった。

レナと最近本気で喧嘩した事など無かったので対応に困り果てた。

気を取り直してチトセとレナは一生懸命働いた。客の賑わいに負けないくらいに……。

2時間後……

レナ「うん」

チサト「え？」

レナはいきなり喋った。

レナ「信じてる・・・チサトはそんな事で私を嫌ったりしないよね？」

チサト「も、もちろんさ」

いきなりの質問にチサトは驚きを隠せなかった。

レナは足元にあった箱からもう一本の酒を取り出した。

レナ「じゃ、今夜は飲もう」

仕方なくチサトはレナに付き合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1406z/>

君が望むファンタジー

2011年12月4日23時56分発行